

「1960年代以後の日本社会におけるうつ病の概念的変遷」への追補 Supplement to “Transformations of the Concept of Depression in Japan after the 1960s”

千葉大学人文公共学府博士後期課程 1 年

鈴木 南音

SUZUKI Minato

2019 年に公開した拙論文「1960 年代以後の日本社会におけるうつ病の概念的変遷」¹に対して、重要な先行研究に対する言及の不足があるというご指摘を頂いた。頂いたご指摘を受け止め、2020 年 10 月に新たに文献調査を行なったところ、本論文との関係を明確にしておくべきと考えられる重要な先行研究への言及不足が確認できたため、ここで、大幅な注を追補することにした。先達によって培われてきた知見を尊重するというのは、研究者として何よりも優先すべきことのひとつであり、先行研究への言及が不十分であった点について、その責任を重く受け止めている。補注においては、先行研究と本論文の差異を明示することによって、先行研究の独創性を尊重し、本論文の学問的位置づけを明確にすることを試みた。この場をお借りして、ご指摘・ご指導を頂いた方々、人文公共学府の方々、編集委員会の方々に、心より感謝申し上げたい。(2020 年 11 月 1 日)

162 ページ

1-1 節 うつ病と、「うつ病」言説の現状への補注

「先行研究と、本論の問いおよび分析方法・分析対象との関係性」

本稿が立てた「うつ病」の増加の原因を探求するという問い、および、その分析方法・分析対象の、先行研究との差異を明確にしたい。まず、「うつ病」診断数の増加について先行研究として、佐藤（2013：14-5）は、医療関係者が行なってきた「うつ病」患者の増加についての批評に対して、「医薬的なファクターが、具体的にどのようなメカニズムによって患者数の増大や診断名の大衆化に結びつくのか、その詳細な過程が明らかにされていない」こと、そして、なぜ他の精神疾患ではなく「うつ病」が増加したのかという比較社会学的問題に答えていないということ、以上 2 点を指摘し、特定の精神疾患に対する大衆言説が構成された原因を探求する必要性を説き、狂気、神経病、神経衰弱、ヒステリー、外傷性神経症、ノイローゼといった他の精神疾患にまつわる言説を分析することによって、それぞれの精神疾患の要因の共通点・差異点を比較社会学的に剔抉している。それに対して本論文では、佐藤（2013）では、副次的な分析にとどまっていた「うつ病」に特に焦点を当て、比較社会学的な方法ではなく、エスノメソドロジー的な方法、とりわけ、概念の使用の論理を分析する方法（Coulter 1979=1998）によって、「うつ病」の診断数の増加を要因を明らかにすることを試みた。その他の先行研究については 163 ページ 2-1-1 節以降の分析のための方法論に関する補注 1「ループ効果・精神疾患に関する先行研究と、概念

1 鈴木南音、2019、『千葉大学人文公共学研究論集』39号、pp. 161-177

分析について」を参照されたい。また、概念の使用の論理、および、概念分析という手法については、162 ページ 1-3 節「うつ病」となる可能性—概念分析への補注『概念分析』という分析手法について」を参照されたい。

162 ページ

1-3 節 「うつ病」となる可能性—概念分析への補注 『概念分析』という分析手法について」

では、概念分析とはどのような手法だろうか。この補注では、「うつ病」の増加を、どうして概念分析という手法を用いて分析するのかについて、理論的な先行研究との関係を明確にすることを試みたい。

1960 年代、欧米を中心に反医療化の社会学が流行した。彼らは、逸脱の医療化という視点から精神医療を捉えていた。そのような逸脱論の立場から精神医療を分析した古典的著作として、トマス・J・シェフ（1966 = 1979）がある。シェフは、ラベリング論の観点から、いかに精神疾患というラベルが患者に貼り付けられ、ラベルが固定されていくのかについての分析を行なっている。シェフ（1966=1979）は、法制度と医療制度とを対比させ、法制度では推定無罪の原則が正当なものとして受け入れられている一方で、医療制度の場合、「健康な患者を入院させたままにしておくより、病気の患者を退院させた方が遥かに罪深く、そのルールが一般的な規範として働いているということを指摘している（Scheff 1966=1979：114）。

この主張の背景には、客観的に区別できるはずの、本物のうつ病患者と偽物のうつ病患者とが混同されてしまっているという前提があるように思う。精神病は、他の器質的な病気と異なり、必ずしも客観的に区別しうるような種類の対象ではない。たとえば、骨折した患者はレントゲンを撮れば、骨折しているかどうか分かる²。しかし、いわゆる機能性の精神疾患の場合はそう簡単ではない。機能性の精神疾患は、身体の病と同じように、明確な対象を持って存在するとは言い難いからである。

しかし、ジェフ・クルター（1979=1998）が、指摘しているように、このようなことから、精神病が神話であるとか、精神科医による診断は主観的なものにすぎないということが帰結されるわけではない。クルターは、シェフらのラベリング理論を批判しながら、以下のように述べている。

「精神病」の実際の評価は、しかるべき組織のなかで、その偶然的条件に依存しながら下される。精神病をこのようなコンテクストから切り離して考えるときのみ、わたしたちは、なにか厳密な規則・定義によって診断の実践を厳格に統制でき、そうした統一性と一致が確保できるはずだといった考えにとらわれてしまうのだ。精神科医による診断とは、なによりも、患者をどの病棟におくるか、患者にどのような治療を施すかという、そのつどの実際的な目的のために用いるべき道具立てにほかならない。

2 もちろん、ある身体の状況が「骨折」という概念のもとで記述されること、それ自体が問題となることはあろうだろう。しかし、ここではとりあえず、精神病よりかはその診断の「客観性」が問題視されづらい例として、「骨折」を例に挙げている。

(Coulter 1979=1998 : 232)

このクルターの指摘は、われわれが、なぜうつ病患者が増加したのかについて考えるさいに、重要である。このクルターの指摘にしたがえば、そもそも「うつ病」の診断は、本質的な定義にしたがって下されるものではない。定義を厳格に定めたところで、精神科医の診断にはほとんど影響がないだろう。それゆえ、われわれが「うつ病」の診断が増えていることを考察するにあたって、その原因を定義の曖昧さに求めるのは、困難を孕んでいる。

また、クルターは、以下のようにも述べている。

精神科の診断は、ふるまいや信念の評価をともなう帰属実践のうちのひとつであり、医師でなくとも、だれかのことをちゃんと精神病だと判断できる。そして、最初の帰属は、精神科医によってではなく、たいていは素人によってなされる。精神科医がしかるべき理由付けをもって機能性の精神病があるかないかを述べていくやり方は、素人の心理学的な理由付けと本質的には変わりがなく、精神病の有無を判断するのに、専門的な知識・技能が必要なわけではないのだ。(Coulter 1979 = 1998 : 233-5)

ここでクルターが指摘しているように、精神科医の診断と素人の帰属実践とは、本質的に変わらない。そうだとすれば、「うつ病」の患者数が増加していく原因を明らかにするにあたって、「最初の帰属」を行なう市井の人々が持っている「うつ病」観を分析することには意義があると言える。というのは、彼らの帰属の仕方は、医師が用いている診断の仕方と本質的には変わり無く、しかも、最初の帰属は彼らによってなされるからである。

そうだとすれば、現代の「うつ病」患者の増加を検討していく際に、医師の診断に先立って最初の診断を行なう市井の人々が、どのように「うつ病」という概念を自己あるいは他者に帰属させているのかについての探求がありうるはずである。この点をクルター(1979=1998)に倣って言うならば、そのつどのコンテキストの中で、概念が使用されるやり方、いわば、「うつ病」概念の「使用の論理」の探求である。すなわち、(論理学が扱うような)形式的な論理ではなく、人々が、その概念を用いる際に参照している規則・概念間の結びつきを明らかにする探求である。本論文は、そのような、特に市井の人々がどのように「うつ病」概念を用いているのかについて、その変遷を明らかにしたものである。

162 ページ

1-4 節ループ効果への補注

「ハッキングの諸概念の説明と、それらの概念を用いた先行研究との関係性、および本論文で指摘したポジティブ・フィードバックと『ループ効果』の違い」

まず、本論の中で詳しく触れることのできなかつた「相互作用する種類」について、詳述する。ハッキング(1999=2006)は、「相互作用する種類」という概念を、「狂気」という章のなかで、注意欠陥多動性障害(ADHD)や、精神薄弱、統合失調症、子供自閉症な

どの精神疾患を例としながら提起している。そこでは、「相互作用する種類」と「無反応種」とが対比されており、哲学でよく使われる「自然種」という概念を使うことを、その哲学的含意を意図せずして含んでしまうことを防ぐために、あえて避けることが明示されている（Hacking 1999=2006：240）。このハッキングの指摘に倣って、本論では、「相互作用する種類」に対比される種類を、「無反応種」と呼び、うつ病の「相互作用する種類」としての特性のみに焦点化して分析を行なった。

「うつ病」と「ループ効果」の関係性については、ハッキング（1999=2006）も明示的に述べており、「うつ症状と感情を減じるためになされる、行動を変化させる処方を受入れる。数え切れないほど多様にわたる行動が強化され、そのすべてがうつである」という分類に対立する。患者はこうした新しい方法で生活を始める。行動作用が変化すると、うつに関する精神医学の理解も変わる」（Hacking 1999=2006：270）とし、「うつ病」を分類のレベルでのループ効果が起こる対象として、すなわち、「相互作用する種類」の例として挙げている。ただし、ハッキング（1999=2006）は、精神疾患を「無反応種」でもあると述べている。この点について、佐藤（2013：48-53）は、精神疾患にまつわる歴史研究には、大きく分けて、言説の「構築」過程と「実態」の変化、それぞれに着目した二種類の研究があることを指摘し、精神疾患を「相互作用する種類」（構築）かつ「無反応種」（実態）として捉えるハッキングの議論が、精神疾患に関する言説を歴史社会学的に分析する際に、精神疾患を、実態的かつ構築的な2つの性質を持つものとして理解する際の指針になるということを示している。そのような意味で、「うつ病」の「相互作用する種類」としてだけの特性に焦点を当てた本論は、佐藤（2013）が指摘しているような二面性について分析することはできなかった。しかし、ループ効果を分析の中心に据えることによって、実践のなかで使用される「うつ病」概念の動的な変容過程を明らかにすることができた。

なお、ハッキングが指摘している「ループ効果」は、本論の中で指摘したポジティブ・フィードバックとは、異なるものである点に注意されたい。ループ効果は、対象を分類するやり方と、対象のあり方とが相互作用する現象を示す概念であるのに対して、先に指摘したポジティブ・フィードバックとは、「うつ病」の患者の増加が、新たな患者の増加を生み出すような、いわば、増加が増加を再生産する、閉じられたシステムのなかでのフィードバックのことである。たとえば、ウェーバー（1920=1989）が指摘した、資本主義が限りなく拡張し続けていくという、「鉄の檻」と名指された現象は、ポジティブ・フィードバックの一例であるように思う。本論文の結論を先取って言えば、カルヴィニズムが資本主義という自己拡大するシステムにとって決定的な契機となったことと同様に、「うつ病」という概念と「社会」という概念との概念的な結びつきが、「うつ病」言説・患者が自己拡大するポジティブ・フィードバックにとって決定的な契機になった、ということである。

また、ここで主張しているポジティブ・フィードバックの議論は、ラベリング論で言われるような、「患者にラベルが貼られる」→「患者がラベルによって与えられたアイデンティティに沿うように振る舞うようになる」→「貼られたラベルが強化される」というフィードバック（Scheff 1966）とは異なるということも付言しておきたい。ここでフィードバックと呼んでいるのは、本論で前述しているような、「うつ病の患者数増加」→「うつ病に関する言説の数が増加」→「精神科医を訪れる人の数増加」→「うつ病の患者数増加」→…、

という数に関わる現象のことであって、このことは、「うつ病」患者のアイデンティティや振る舞い方の変化とは異なる現象である。患者数・言説の数・訪れる人の数、それぞれの数の問題だけを、本論文ではポジティブ・フィードバックと呼んでいる。そして、本論文文中に出てくる「ループ効果」(Hacking1995 = 1998) とポジティブ・フィードバックは、異なる現象のことを指している。

ここで、特に日本の「うつ病」について、ループ効果という特徴に着目した研究をいくつか挙げておきたい。まず、日本における「うつ病」患者の増加や「うつ病」言説の変容という現象を、精神医学の専門的言説や治療技術との関連も含めて、詳細かつ体系的に分析した先行研究に、北中（2014）がある。一方で本論文は、言説数と患者数とが増加するポジティブ・フィードバックの契機となりうる、市井の人々が用いている概念の変化に焦点化して、分析を行なった。また、佐藤（2013）は、ループ効果に着目して、うつ病に限らず、日本における精神疾患に関する言説の興隆について、体系的な分析を行なっている。これらの先行研究については、163 ページ 2-1-1 節以降の分析のための方法論に関する補注 1「ループ効果・精神疾患に関する先行研究と、概念分析について」箇所でもより詳しく述べるので、そちらを参照されたい。

163 ページ

2-1-1 節以降の分析のための方法論に関する補注 1

「ループ効果・精神疾患に関する先行研究と、概念分析について」

この補注では、ループ効果・精神疾患について述べた先行研究との関係を明確することを試みたい。精神疾患について、ループ効果を念頭におきながら分析した研究としては、ハッキングの『記憶を書き換える』(Hacking 1995=1998) や『マッド・トラベラーズ』(Hacking 1998=2017) がある。これらのハッキングの諸概念から示唆を受けた経験的探求は、日本においてもいくつかなされている。たとえば、酒井ら（2009）の研究である。彼らは、ハッキングのループ効果を分析の軸に用いつつ、より実践的な場面における概念の使用に目を向けた、エスノメソドロロジー的探求を行なっており、その点で、本研究は彼らが行なっている「概念分析の社会学」の潮流のなかに位置づけられる。特に、本論が持つ視点は、同著のなかで前田（2009）が提示している、ウィトゲンシュタイン派エスノメソドロロジーの影響を強く受けつつ、ループ効果に着目した概念分析の視座と近い。すなわち、「うつ病」という概念が用いられているかどうかだけではなく、「うつ病」概念がどのように用いられているのか、その使用の実践に分析の焦点を当てて分析している点において、本稿は、エスノメソドロロジー的分析として位置づけることができる。

また、これと関連して、概念分析と構築主義の関係性を、イアン・ハッキングやエスノメソドロロジーの議論を参照しながら論じたものとして、小宮（2017）がある。さらに、憂鬱という患者の「経験」と、精神科医の「専門性」が、個別具体的な活動の中で、治療や助言を成し遂げるためにいかに結び付けられているか（また、専門家というレリヴァンスがいかに解除されているか）を研究したものとして、安藤（2009）がある。彼らの要点は、ウィンチ（1958=1977）やハッキング（1995 = 1998）の指摘の影響を受けながら、新たに出現したカテゴリーが人々の行為についての理解可能性を変容させ、当の概念を持つ当

人たちの実践をいかに変容させるかを、個別具体的な実践の分析を通して明らかにする点にある（小宮 2017）。本稿の視座は、人々の「うつ病」に関する理解可能性が変容したことによって、人々の実践・最初の帰属がいかに変容したかを問うている点で、彼らの分析視角を受け継いでいる。

特に、科学概念と日常概念とが相互作用するという点と関連して、前田（2009）は、いかに高い専門性を帯びているように見える概念であっても、人間の経験や行為を対象にするものである限り、私達が日常用いている常識的概念と結びつきを持っているということを描き出している。他方、「うつ病」の分析にとって特に重要なのは、常識的概念と結びついているということだけではない。それだけではなく、重要なのは、市井の人々が「うつ病」について語る時、厳密に定義された科学概念を必ずしも参照しているわけではないという点、これである。162 ページ 24 行目に対しての概念分析についての補注で述べたように、「最初の帰属」は、市井の人々に基づいてなされる。そして、市井の人々は、必ずしも科学概念を参照せず、むしろ、常識的概念を参照しながら、最初の帰属を行なっている。そうである限りにおいて、「うつ病」の診断数の増加を追い求めるためには、最初の帰属を行なっている市井の人々が、「うつ病」に関する言説の中で、いかに、常識的概念を参照しているのか、この点をまず検討しなければならない。

つぎに、ループ効果を軸に据えながら、日本における精神疾患を、社会学的に分析した研究を挙げておきたい。まず、佐藤（2013）は、19 世紀後半から 20 世紀後半までの狂気・神経病・神経衰弱・ヒステリー・ノイローゼ言説の盛衰を、ループ効果を軸に据えながら新聞記事を分析することで、歴史社会学的に考察している。また、佐藤（2019）は、ループ効果に着目しながら、「うつ」の増加の原因を統計的な手法を用いて経験的に分析をし、「Hacking が「うつ」を含めた精神医学的な分類の「ループ」として描き出している出来事を、経験的な水準から支持する」ような、社会調査のデータを示している（佐藤 2019：68）。これらの先行研究では、新聞記事の分析を通して様々な精神疾患言説の興隆を分析し（佐藤 2013）、また、統計的手法を用いて「うつ病」のループ効果について分析がなされている（佐藤 2019）。しかしながら、本論が行なっているような、「1960 年代以後」かつ「うつ病」の新聞記事に特に焦点化した分析は、管見の限り、見られないように思う。

そして、日本における「うつ病」については、北中淳子が、医療人類学の立場から多くの知見を蓄積している。北中（2014）は、「うつ病」を「相互作用する種類」（Hacking 1999=2006）として捉え、大うつ病というカテゴリーが市井の人々の間に広がったことに、うつ病の患者の増加や多様化の一因があるということ、エスノグラフィックな調査を交えながら、「うつ病」をめぐる多様な言説が織りなすループ効果（Hacking 1995=1998）の分析を通して指摘している。さらに、2000 年代以降、「新たな大うつ病というカテゴリーがメディアを通じて急速に一般の人々にも広がり、今まで精神科医が出会わなかったような広い範囲の人たちが、みずからうつ病であると信じ、時にはアイデンティティ化して診断を求めてくる」ようになったことを指摘している（北中 2014：18）。この点は、北中（2015）でも、言説の分析を通して詳しく指摘されている。さらに、神経衰弱については北中（2004 a）が詳しく論じており、また、前近代、そして近世から現代までの日本における鬱病の意味の変化については、北中（2004 b）に詳しい。また、詳細なフィールドワークを元に、自殺に関する精神科医の臨床実践の詳細を明らかにしたものとして、北中（2007）

がある。

これらの先行研究では、多様な言説のなかで、「うつ病」観がどのように変容していったのかが、詳らかに明らかにされている。しかしながら、特に、市井の人々の「うつ病」概念の用いられ方、いわば、概念が使用される際の論理文法（Coulter 1979=1998）に、先に述べたような患者数と言説数との間で起こるポジティブ・フィードバックを生み出した原因を求めた研究は、管見の限り、見られないように思う。ウィンチ（1958=1977）が指摘しているように、ある行為についての概念を持つということは、その行為を成し遂げるための条件である。たとえば、「投票」という概念を持たない人が、投票用紙に候補者の名前を書いて投票箱に入れたとしても、彼が投票したとすることはできない。本論の特徴は、そのような視座のもと、自分が当てはまりうる概念としての「うつ病」概念を持つことが、「うつ病」にかかりうるための条件であると捉え、そのような「うつ病」概念の理解可能性＝行為可能性がどのように成立していったのかを、理解可能性を支える概念の連関（およびその連関を支える非形式的な「使用論理」）という観点からエスノメソドロジーの方法を用いて記述することで、「うつ病」の診断数増加の原因を探ったという点にある。

163 ページ

2-1-1 節以降の分析のための方法論に関する補注 2

「新聞記事を分析することについて」

ここで、新聞記事という分析対象についても言及したい。本論文では、主に新聞記事を対象に分析を行なった。新聞記事を分析対象にしたのは、先に述べたように、市井の人々の概念の変容を分析する本研究の目的に合致したものであると考えられるからである。

佐藤（2013：55）は、大衆に向けた新聞には、「医学的知識と民衆の世界観が相互に対立し、均衡点を見出し、また混合してゆく過程が幾度となく見られる」ことを指摘し、精神疾患の流行と衰退を明らかにするために、新聞記事のなかのこうした過程を分析する必要性を説いている。これは、「うつ病」においてもあてはまるだろう。「うつ病」について探求するにあたって、市井の人々が「うつ病」という概念をどのように捉え、そして日常生活の中で使用しているのかという点は、決定的に重要である。それゆえ、新聞記事は、市井の人々の概念の用い方を追いかける本論にとって有用であると言える。

ところで、本論の分析は、新聞記事中に登場する医師の語りにも向けられているため、もしかしたら、それが医師の語りである限り、市井の人々の論理を分析することにはならないのではないかと思われるかもしれない。しかし、新聞記事中で医師が使用している論理は、医学界で用いられている論理というより、むしろ、本論が探求したい市井の人々が用いている論理に近い。というのは、それが新聞記事に掲載され、主に市井の人々が読むであろうことを医師が想定して寄稿している限り、その語りの理解可能性を成り立たせている使用の論理は、医学界で用いられているような厳密な定義と形式論理ではなく、市井の人々の間で成り立っている論理であるはずだからである（このことは、新聞記事中の語りである限りにおいて、医師たちは、市井の人々にとって理解可能な言説を生み出している、ということでもある）。それが新聞記事である限り、市井の人々が持つ理解可能性＝概念の結びつきが、書き手にとって志向されている。だからこそ、本論では、新聞記事の

語りに特に焦点を当てて、分析を試みた。

新聞記事は、『朝日新聞』と『読売新聞』を分析対象とした。これらの二紙を分析対象としたのは、これまで刊行された二紙を含むすべての新聞を分析対象とすると、その量が膨大なものとなってしまい、現実的に分析が難しいためである。また、『朝日新聞』と『読売新聞』を対象としたのは、電子化されたデータベースが存在しており、キーワードでの検索が可能であるという現実的な理由による。

新聞記事の分析にあたって使用したデータベースを記す。『朝日新聞』の記事の分析には、「聞蔵Ⅱビジュアル・フォーライブラリー」を用いた。1985年以前の記事を分析対象とする分析には、「朝日新聞縮刷版」を分析した。『読売新聞』の記事の分析には、「ヨミダス歴史館」を用いた。これらのデータベースをもとに、60年代から90年代初頭までは、「うつ病」でヒットした全ての新聞記事を網羅的に調査した。1960年から1990年までで「うつ病」で検索すると、30年間でヒットした記事が、「朝日新聞縮刷版」では71件、「読売新聞」では見出し検索で78件あり、それら全てに目を通した上で、「うつ病」概念と他の概念の結びつきの変容に着目して記事を選び出し、分析を行なった。言説の数が膨れ上がった90年代は、朝日新聞が29件、読売新聞の見出し検索が559件あり、言説の数が増加した以降の時期に関しては、とりわけ重要と思われる新聞記事を分析した。

一方で、医学論文は、医師の診察に大きな影響を与え、また新聞記事における医者への語りの論拠となっていることがあるため、これも部分的に分析の対象に加えた。特に、新聞記事中で登場する「うつ病」にまつわる用語の変遷を追いかけるためには、医学論文を参照する必要がある。佐藤（2007：59）は、精神疾患言説を分析するにあたって、医学論文を、「結果的に大衆化した医学的知識がどのような過程で生産されたのかを確認するために」分析対象に加えている。「うつ病」に焦点を当てて分析する本論も、医学論文も必要に応じて分析し、どのように現在の「うつ病」概念が形作られたのかについて検討した。

163 ページ下から 11 行目

「日本で初めて『軽症うつ病』の概念を用いたのは、平沢一（1964）である。」への補注。
「平沢一の『軽症うつ病』について分析した先行研究について」

平沢一の言説に着目したことに関連して、北中（2011：34）は、うつ病に陥る人々の共通の性格を指摘し、その社会的状況をも分析の視座に取り入れたテレンバッハの「メランコリー親和型」論と、うつ病の原因を遺伝的要因に求める下田光造の執着気質論との類似性が、平沢ら（1966）によって指摘されることで、うつ病の原因を性格にも状況にも求める、病前性格-状況論が広まったことを指摘している。一方、本論文では、精神科医たちによって徐々にネガティブなイメージが払拭されることが試みられつつも、市井の人々にとっては、未だ「うつ病」は、ネガティブで「遺伝」と結びついたものであり、この時点では、市井の人々の間では状況や性格とは結びついていなかったということを示した。このことは、「啓蒙」という行為が精神科医によって行なわれているということからも明らかである。というのは、仮に「軽症うつ病」という概念が既に市井の人々の間に流布していたならば、もはやそのような啓蒙は、啓蒙としての行為を成し得ないはずだからである。市井の人々に、当の概念が広まっていないからこそ、啓蒙という行為が可能になる。

ここでは、医師の啓蒙という行為から、市井の人々の間では、未だ「軽症うつ病」が広まっていなかったということを示した。

164 ページ下から 5 行目

「1960年代は、うつ病に関する言説はあまりない」へ補注

「1960年代の具体的な新聞記事の量について」

記事の量について明確にする。『朝日新聞』データベースのうち、「うつ病」で検索したときにヒットする1960年代の記事は、4件ある。そのうち、2つの記事の本論では分析した。他方、分析しなかった2つの記事は、エドガー・アラン・ポーの抑うつ症状について取り扱った1960年2月12日「ポーと抑うつ病」と、日本開発銀行の元監事の自殺を取り扱った1968年11月19日「初老期のうつ病？」である。これらを取り上げず、他の2つの記事を取り上げた理由として、取り上げなかった2つの記事は、「うつ病」ではなく、亡くなった個人に焦点が当てられて記事化されているからである。（すなわち、亡くなったのがその人でなければ、記事にならないような記事だったからである。）

164 ページ下から 3 行目

「佐藤雅浩によると、1960年代の精神疾患に関する『朝日新聞』の記事のうち、53.23%を占める（佐藤雅浩 2007）。」へ補注

「1960年代の精神疾患の逸脱報道についての先行研究との関係性」

佐藤（2007：193）は、ライシャワー事件をはじめ、1970年代初頭までの新聞記事の分析を通して、「『心の病』を抱えた人々を収容治療する精神医療の実践と、犯罪・事件報道を通じて『心の病』の恐ろしさを伝えるマスメディア報道は、『心の病』を当時の社会から隔離・排除しようとする点で共通の志向性を持っていた」ことを指摘している。本論では、60年代以後、そのようなネガティブなイメージがいかんにして払拭され、「うつ病」の患者数が増加したのかを明らかにした。

166 ページ 11 行目

「『朝日新聞』1967年10月25日刊行東京版夕刊である」へ補注

「『朝日新聞』1967年10月25日刊行東京版夕刊を分析した先行研究との関係性」

北中（2014：121）は、この柴田収一が朝日新聞に寄稿した同一の記事を例に挙げ、「この時期、うつ病を語る言葉自体が大きく変わった」としている。そして、「治る疾病単位ができたことによって、『うつ病』患者が掘り起こされ、それまでのアサイラム精神医学ではとうてい出会うことのなかったような患者が、精神科を訪れるように」なり、「治る病気」として位置づけられるようになったことを、鋭く指摘している（北中 2014：121）。ここで北中（2014）が観察しているように、精神科医が行なう言説については、この時期が大きな転換点であることには間違いない。

他方で、この時代は、先に取り上げた『朝日新聞』1966年12月21日朝刊「そううつ

病の兄を持つ妹の結婚」や、『読売新聞』1966年3月18日朝刊「[人生案内] ウツ病に悩む女性 結婚を望んではいけないか」における相談を持ちかけた市井の人々の語り示しているように、市井の人々の間では、「うつ病」は遺伝的な病とみなされており、未だ強い偏見が残る時代でもあった。だからこそ、柴田収一をはじめ、精神科医たちが新聞記事などへの寄稿の中で、市井の人々に対して啓蒙を行なう必要があり、このような言説が出現したのだろう。そして、うつ病の増加の原因を探りたい本論文にとって重要なのは、治るか治らないかは別の問題として、市井の人々にとっては、未だ「うつ病」が、限られた個人の問題である「遺伝」に結び付けられていたがゆえに、多くの人々にとって「うつ病」は自分ごととして捉えられることがなかったということである。

167 ページ

2-3-2 節 「仮面うつ病」はなぜ流布したかへの補注

『仮面うつ病』と心身相関について述べた先行研究との関係性

先行研究との関係性を明確にする。佐藤（2005）はこの記事を例に挙げ、「心身症」「自律神経失調症」「仮面うつ病」「心臓神経症」などの、心身相関言説の興隆が1970年代に起きたことを指摘し、それらの言説は、精神症状のみが問題とされる「1950年代のノイローゼ言説から継続する精神分析的な病因論（心因論）」が継続されていることを指摘している。たとえば、「仮面うつ病」の場合、心の状態が身体的症状として現れてくるとされる点に、その心身相関的な視座があるとされている。そして、このことが、身体と同様に外部の刺激を受容する精神像を形作り、精神疾患の環境要因論が生まれてきたことを明らかにしている。また、佐藤（2007、2013）は、ノイローゼをはじめ、この時期に流布した「心の病」言説は、心身相関の視座をもとに、精神的な問題から生じる身体症状がクローズアップされていることを指摘している。そのなかで、新聞記事中で取り上げられた「仮面うつ病」を分析し、「[うつ病]を始めとする精神疾患が、身体疾患と誤診される危険性について人々の啓蒙を企図していた」（佐藤 2007：198）とし、心身相関の考え方に基づいて、身体症状の重要性を訴える言説が構成されていたということを示している。他方、本論では、この「仮面うつ病」が広がったことの契機を、既に広がっていた「軽症うつ病」概念と融合したことに求めた。

170 ページ

2-4-2 節 1980年代末期から—「テクノストレス」と「うつ病」への補注

「テクノストレスと精神疾患について述べた先行研究との関係性」

「テクノストレス」に言及している先行研究と本論文との関連を明確にする。佐藤（2007：203-5）は、この時期の「テクノストレス」言説を分析し、この時期に流布した「心身症」「自律神経失調症」「アルコール依存症」などの診断名が、「勤労者や主婦など『普通の』人々が配慮すべき健康問題として位置づけていくもの」（佐藤 2007：206）だったことを指摘している。そして、これらの「職場のメンタルヘルス向上をうたう言説は、単に勤労者の保護を目指すものではなく、「勤労者の「心の病」が企業にとっても損失であることを

啓発し、さらなる生産性の向上を目指すために産業現場に導入された言説である」とし、心の病が日常化していったことを指摘している（佐藤 2007：205）。

一方、本論のこの節では、佐藤（2007）が指摘しているような「心の病の日常化」ではなく、むしろその前提となる概念間の結びつきに特に注目し、このような「テクノストレス」概念が、「仮面うつ病」で培われた心身相関的な視座を媒介しながら、「うつ病」概念を、社会的概念たる「職場」概念と結びつける契機となったのではないかということをも指摘した。

172 ページ

2-5 節 1990年代—社会因としての「うつ病」への補注。

『うつ病』と社会因、電通裁判事件に関する先行研究と本論の関係性

山田（2008：45）は、1990年代末から現れた「心の健康」健康をめぐる動向を整理しつつ、「『心の健康』をめぐる動きにおいて特徴的なのは、自殺やうつ病は個人の問題ではなく、社会全体の問題として提起されている点である」と指摘し、労働問題の精神医療化という観点から、社会学的な分析を行なっている。この点は、山田（2019：91）でも詳しく論じられており、2000年～2001年の新聞記事の中で裁判の過程が報道される際には、「過労の末自殺に追い込まれた」というような単純な類型化のもとで語られ、「過労やストレスで自殺することがありうること、それは労働災害として保証される可能性があるという社会意識の情勢につながった」とことを指摘している。

また、北中（2014：203）は、1998年以降の自殺の流行において、「自殺をうつ病と語ることが、同時にうつ病を社会化することにもつながっている」とことを指摘している。これらの指摘は、近年の「うつ病」の増加について検討する上で、重要な指摘である。そして北中（2003：9）は、電通の過労死裁判においては社会の病理性が問われており、「1990年代以降のうつ病・自殺啓発の世界的広まりの中でも、社会的な因果律をこれほどまで明確に打ち出した日本のケースはおそらく稀」と述べ、自殺の医療化が責任を個人へと反転させる可能性への懸念を示している。この点は、北中（2011：30）でも詳しく論じられており、「うつ病の言説を通じて、こころの病が『公的な病』として捉え直され、その『社会因』への新たな探求が」新たに始まっていること、そして「鬱的な性格が、社会的に形成されるという視点を取り入れ」られ解釈されることで、「うつ病は個人の『私的な病』から企業や政府の責任が問われる『公的な病』へと大きく変貌した」とことを、電通事件を例に挙げながら指摘されている。この電通裁判は、北中（2014：171-4）によれば、「従来個人の素因を主張することに使われがちであった精神医学理論が、うつ病の社会因を確立するために用いられたという点が画期的」であり、この裁判の結果、「長引く不況下、過重な心理的負荷を経験した労働者が、追いつめられたすえにうつ病に陥る、というストレス説は、1990年代以降これを法的に確立した一連の裁判によって、社会的にも広く認められ、「うつ病」が「誰でもなる病気」であることが立証された、としている。これは、この電通裁判と「うつ病」との関係性を考察するにあたって、極めて重要な指摘である。

この電通裁判に関する点は、元森（2016：153）も指摘しており、「精神障害というレトリックによる法的免責と社会運動化といった自殺の意味論のこの現代的転換で、重要な位

置を占めると考えられるのが『過労自殺』、そして、『歴史的』判決といわれた冒頭の電通過労自殺裁判最高裁判決である」とし、その注目すべき点として、原告側が、自らの意思による自殺ではなく、精神障害によって自殺させられたという論理構成を用いたということを指摘している。

また、岩波（2015）は、1990年代後半に、過労自殺や労働問題と関連する「うつ病」を取り扱った新聞記事が増加したことを指摘し、「いわゆる『電通事件』によって労働災害としてのうつ病、自殺がクローズアップされたのが、1990年代の前半以降のことである」とし、この時期に書かれた新聞記事は、「うつ病が単なる一個人の疾患というだけでなく、社会的に重要な意味を持っていることを指摘するものであった」ことを示している（岩波2015：62）。

これらの先行研究は、1990年代のうつ病の患者数増加について検討する際に、いずれも極めて重要な指摘をしている。一方、本論では、電通裁判の重要性を鑑みつつも、電通の裁判が行なわれる以前の1980年代中頃から既に、「テクノストレス」などの概念を媒介として、「うつ病」と「社会」との概念同士の結びつきが起きていたこと、そして、「1991年から1993年ごろに、『過労死』は『自殺』を含む概念へと変容していった」（本論：174）ことを、新聞記事の分析に焦点化しつつ指摘し、そのような変化がポジティブ・フィードバック成立のための条件となっていることを示した。

この分析の妥当性は、172ページ5行目で言及した、『読売新聞』1992年3月23日『春に襲う心の病 まじめ社員 SOS 職場の悩みが8割 上手に遊び、ゆとりを』からも見て取れる。この記事では、「Aさんの心の病は、バブル景気がはじけたことも関係していると関谷院長は推測する。不動産不況で取引が低迷、管理職の立場から『実績が上がらないことでストレスがたまった』とみる。」と記述されており、電通裁判以前から既に、社会的要因とうつ病との概念間の結びつきが利用されている。

最後に、本論で言及した川人（1998）との関係性も明確にしておきたい。川人（1998）は、1996年3月に「電通社員の自殺事件の判決が出され、自殺の原因が仕事の過労によるものと認められた」とし、「過労自殺は、多くの場合、うつ病などの精神障害に陥った末の自殺である」としている。そして、川人（1998：117）は、労働省が労災と認定している自殺を3つに類型化し、「ア心因性精神障害による自殺その1（業務→精神障害→自殺）」、「イ心因性精神障害による自殺その2（業務→負傷・疾病→精神障害→自殺）」、「ウ外因性精神障害による自殺（業務→精神障害→自殺）」の3つを挙げ、このうちの「ア心因性精神障害による自殺その1（業務→精神障害→自殺）」だけが、過労自殺に区分できるということを示唆している。この川人が1998年に行なった類型化は、精神障害と社会因との結びつきを示唆しており、本論の主張を裏付けるものである。

追補版にあたっての今後の展望

頂いたご指摘を元に、大規模な文献調査を行ない、また、本研究で取った概念分析という方法論についても、より明確化することができた。その中で、本論が残している課題も明らかになってきたため、最後に、その点について示したい。

まず、本論は主に、新聞記事の分析を通して、市井の人々が用いている「うつ病」の使

用論理を明らかにしてきた。一方、新聞記事の分析を通して明らかになるのは、「彼らがどのように最初の帰属を行なったか」についての彼ら自身による後付けの理解に過ぎず、実際の対面的相互行為のなかでどのように最初の帰属が行なわれるのかについては、新聞記事の分析だけでは解明できない。たとえば、Coulterが指摘している「最初の帰属」がいかに行なわれるかは、実際のやりとりを含めた、他の様々な資料により解明される必要があるだろう。これは、「うつ病」だけではなく、「見る」「感じる」などの知覚や感覚や感情に関する概念などを含む、心的概念の研究一般についても言えるように思う。心的概念が必ずしも、(内面の)出来事を指すものではないならば、その帰属が、心理学の専門家ではない市井の人々によってどうなされるかが、鋭く問われる必要があるだろう。とくに、実際の相互行為を分析する会話分析の手法は、その解明に寄与している。この点についての、今後の展開が待たれる。

追補版で言及した文献を含む参考文献リスト

- Coulter, Jeff, 1979, *The Social Construction of Mind*, London: Macmillan. (= 1998, 西阪仰訳『心の社会的構成——ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロロジーの視点』新曜社.)
- Craig, Brod, 1984, *Technostress*, Massachusetts, Addison-Wesley Publishing Company. (= 1984, 池央耿・高見浩訳『テクノストレス』新潮社.)
- Frances, Allen, 2013, *Saving Normal*, London, William Morrow. (= 2013, 青木創訳『〈正常〉を救え——精神医学を混乱させる DSM-5 への警告』講談社.)
- Freidson, Eliot, 1980, *Patients' view of Medical Practice*, The University of Chicago Press.
- Hacking, Ian, 1995, *Rewriting the Soul: Multiple Personality and the Sciences of Memory*, Princeton University Press. (= 1998, 北沢格訳『記憶を書きかえる——多重人格と心のメカニズム』早川書房.)
- , 1998, *Mad Travelers: Reflections on the Reality of Transient Mental Illness*, Virginia: University of Virginia Press. (= 2017, 江口重幸・大前晋・下地明友・三脇康生・ヤニス・ガイタニディス訳『マッド・トラベラーズ——ある精神疾患の誕生と消滅』岩波書店.)
- , 1999, *The Social Construction of What?*, Harvard University Press. (= 2006, 出口康夫・久米暁訳『何が社会的に構成されるのか』, 岩波書店.)
- Scheff, J, Thomas, 1966, *Being Mentally Ill: A Sociological Theory* (= 1979, 市川孝一・真田孝昭訳『狂気の烙印——精神病の社会学』誠信書房.)
- Weber, Max, 1904, *Die Protestantische Ethik Und Der Geist Des Kapitalismus*. (= 1989, 大塚久雄訳『プロテスタンティズムと資本主義の精神』岩波書店.)
- Winch, P. (1958). *The idea of a social science and its relation to philosophy*. Routledge. (= 守山規雄訳, (1977), 『社会科学の理念——ウィトゲンシュタイン哲学と社会研究』新曜社.)
- 安藤太郎, 2009, 「医療者の〈専門性〉と患者の〈経験〉」酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編, 『概念分析の社会学』pp.74-98. ナカニシヤ出版.
- 岩波明, 2015, 「マスメディアとうつ病」田島治・張賢徳編『《精神医学の基盤》[2] うつ病診療の論理と倫理』学樹書院, pp.57-65.
- 上畑鉄之丞, 1991, 「過労死の医学的考察」過労死弁護団全国連絡会議編『KAROSHI [過

- 労死] ——経済大国ニッポンのもう一つの真実!』窓社, pp.88-92.
- 川人博, 1998, 『過労自殺』岩波書店.
- 川北幸男, 1985, 「軽症うつ病の診断と治療」『交通医学』39(2), 日本鐵道醫學會, pp.107-120.
- 北中淳子, 2003, 「『医師的な死』と病理の狭間で: 自殺の医療人類学」『三田社会学』8, pp.4-11.
- , 2004a, 「『神経衰弱』盛衰史」『ユリイカ』36 (5), pp.150-167.
- , 2004b, 「鬱の病」栗山茂久・北澤一利編『近代日本の身体感覚』pp.360-390, 青弓社.
- , 2007, 「『意思的な死』を診断する——自殺をめぐる精神医療の人類学」芹沢一也編『時代がつくる「狂気」——精神医療と社会』朝日新聞社, pp.223-262.
- , 2011, 「疲弊の身体と『仕事の科学』——過労うつ病をめぐる」神庭重信・内海健編『「うつ」の構造』弘文堂, pp.28-46.
- , 2014, 『うつの医療人類学』日本評論社.
- , 2015, 「うつ病の論理と倫理——医療人類学的視点から」田島治・張賢徳編『《精神医学の基盤》[2] うつ病診療の論理と倫理』学樹書院, pp.46-55.
- 小宮友根, 2017, 「構築主義と概念分析の社会学」『社会学評論』68(1), pp.134-149.
- 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編, 2009, 『概念分析の社会学』ナカニシヤ出版.
- 佐藤雅浩, 2005, 「心理学的疾患言説における精神/身体/外部環境——20世紀日本の大衆メディア言説を対象として」『ソシオロゴス』29, pp.90-109.
- , 2007, 「『心の病』戦後史——狂気の隔離からメンタルヘルスの啓蒙へ」芹沢一也編『時代がつくる「狂気」——精神医療と社会』朝日新聞社, pp.174-221.
- , 2013, 『精神疾患言説の歴史社会学——「心の病」はなぜ流行するのか』新曜社.
- , 2019, 『精神疾患の流行に関する社会学的研究 (1)』『埼玉大学紀要 (教養学部)』55 (1), pp.51-70.
- 白杉悦雄, 2004, 「冷え性の発見」栗山茂久・北澤一利編『近代日本の身体感覚』pp.54-82, 青弓社.
- 田中正敏・小川暢也, 1970, 「仮面デプレッション (masked depression) の診断」『臨牀と研究』47(8), pp.102-108, 大道学館出版部.
- 富高辰一郎, 2009, 『なぜうつ病の人が増えたのか』幻冬舎ルネッサンス.
- 中嶋聡, 2012, 『「新型うつ病」のデタラメ』岩波書店.
- 平沢一・三好功峰, 1964, 「軽症うつ病の臨床像」『精神神経学雑誌』1965, 67(5), pp.480-487, 日本精神神経学会.
- 平沢一, 1966, 『軽症うつ病の臨床と予後』医学書院.
- 前田泰樹, 2009, 「ナビゲーシオン<1>」酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編, 『概念分析の社会学』, pp.3-6, ナカニシヤ出版.
- 宮坂菜穂子, 2004, 「『軽症うつ病』と診断する意味とそのエビデンス『軽症うつ病』の臨床的特徴を中心に」『EBM ジャーナル』5(5), pp.534-537, 中山書店.
- 元森絵里子, 2012, 「『過労自殺の社会学』——法理論と制度運用に着目して」『年報社会学』25, pp.168-179, 関東社会学会.

- , 2016, 「自殺を補償する——二十一世紀転換期の過労自殺訴訟」 貞包英之・元森絵里子・野上元『自殺の歴史社会学』青弓社, pp.144-178.
- 山田陽子, 2008, 「『心の健康』の社会学序説：労働問題の医療化」現代社会学(9), pp.41-60.
- , 2019, 『働く人のための感情資本論——パワハラ・メンタルヘルス・ライフハックの社会学』青土社.

1985年以降の『朝日新聞』の記事の分析には「聞蔵Ⅱビジュアル・フォーライブラリー」, 1985年以前の記事の分析には「朝日新聞縮刷版」を用いた。『読売新聞』には、「ヨミダス歴史館」を用いた。